

落ちる多岐川恭

推理小説

落ちる

多岐川 恭

河出書房新社

作者略歴 大正九年、福岡県八幡市に生まる。
八幡中学、第七高等学校を経て、昭和十九年東大
経済学部卒業。戦後、約一カ年銀行に勤め、二十
三年毎日新聞社に入社。現在西館本社報道部に在
籍。三十三年「水柱」を河出書房新社から出版
し、好評。同年「濡れた心」により江戸川乱歩賞
受賞。本名・松尾舜占。現住所・門司市大里大杉
町県営アパート 235 号

落 ち る

昭和三十三年十一月十日 初版印刷 昭和三十三年十一月十五日 初版発行 定価二八〇円	著 者 多 岐 川 恭 検 印 東京都千代田区神田小川町三ノ八 発行者 河 出 孝 雄 印刷者 草 刈 親 雄	発行所 東京都千代田区 株式 河出書房新社 神田小川町三ノ八 会社
---	--	--------------------------------------

落丁本・乱丁本はお取替いたします

落ちる

1

猫

37

ヒーローの死

73

ある脅迫

113

笑う男

143

私は死んでいる

175

かわいい女

213

あとかき

263

落ちる

玄関に出て靴をはこうとした途端にめまいがした。距離感があいまいになっていて、靴下の足をたたきについて汚してしまった。慣れないせいなのだ、と不安を抑えつけた。

佐久子が来たので、おれはわざと笑顔になって靴をはきにかかった。

「何を笑っていらっしゃるの」

そういう佐久子の声も笑っていた。

「足がとちってねえ、靴下を汚したよ」

「あらあら、しょうがないのね。すっかり大きな坊やになっちまって……」

佐久子は、おれの体をうしろから抱くようにした。押しつけられた肌の感覚がおれを涙ぐませていた。佐久子ははしゃいでいる。

「永く靴をはかないでいると、足がふくれるのかね。何だか窮屈になった」

「本当に永い間ね。でも大丈夫？」

夫婦で外出するのは一年ぶりだ。大丈夫でなくとも中止できはしない。佐久子を失望させないためなら、二、三時間の苦行くらいは何でもないはずだ。

化粧をした佐久子も久しぶりだ。別人のようだ。彫りの深い端正な顔がハツとするほど新鮮に、美しく見える。おれは抱きよせた。唇にふれる時にまためまいが戻って来たが、何ものかに挑戦するように、おれは足をふみしめて格子戸をあけた。

外は朝陽があふれ、植込みの山茶花や木犀のなめらかな葉が白い照り返しを見せている。松の葉が痛いほど鋭く光っていた。眼を上げると、雲一つない青空はギラギラする光を粉のようにまき散らしている。その光の粒々が蝶の鱗粉に似て降りかかってくる……そんな幻覚に襲われる。おれは眼を落した。

佐久子の歩調に合わせて、足もとを見ながら歩きだしたが、案外よろめきもしなかった。

「長峰君を呼んで、一緒に行ってもよかったね」
「どうして？」

おれは後悔した。いらざることを口にしたものだ。佐久子の問い返す表情は、どこか、おれをためていた。

「いや……やっぱり二人のほうがいい。お医者様は今日だけはタブーだ、ははは」

たとえ一日でも、気づかれや鬱積した不幸感から、佐久子を解放してやらなければならない。

陽光にぬぐんだ白い道だ。丸い砂利石がぶつぶつ浮き上って見えるのが、何かの本に載っていた、バクテリアの顕微鏡写真を連想させる。その道が、水底を見下ろしたように、ぐらりとゆれることもあるのだ。かげろうのせいだろうか？

そのうちにおれは、あたり一面、漠然とした敵意に囲まれている気がした。道も、立木も、家も、空も……春の自然がおれにおつかぶさって、じわじわと首をしめてくる感じた。おれはしきりにハンカチで顔をぬぐった。

「暑い？」

眼ざとい佐久子はすぐそう言って、おれをのぞきこんだ。ふとおれは、そのようによく気を使ってくれる佐久子をうとましく思った。それは、おれ自身にも意外な気持だった。弱った神経のせいかもしれないが、おれは恥じた。

おれたちは、禁欲しているわけではなかった。節制は必要だったが、禁欲はかえっていけないというのが長峰の意見だった。だが、こういう中途半端さがよかったかどうか、今のおれは疑っている。

おれと佐久子とは、いわば間歇的に愛し合った。節制の期間を出来る限り長くしたのである。おれは元来性欲のうすい男だ。おれだけだったら、全然の禁欲がむしろ適当だったかもしれない。だ

が、佐久子はそうではなかった。佐久子の体には激しい情欲が流れていた。一週間、十日ときびしくおれをしりぞけながら、結局狂おしく愛撫を求めてくるのは佐久子のほうだった。夜の佐久子は、今横を歩いているつましい妻とは違う。なだれのような荒々しい力が、その四肢を燃え立たせている。受身のおれは、しなやかな腰を支えながら、野獣に抱きすくめられているような錯覚に捉えられることすらあった。そういう夜の愛撫を、おれはいくらか恐れてもいることは事実だった。おれたちは、かならず二日か三日は続けて酔いしれた。激情のあと、おれは頭から血が引いて、真空に投げ出されたような虚脱に陥った。体全体がどこか地下へ深く沈んで行くような気がし、天井の天井が高く高く、小さくなって行くのだ。

……いけない。こりゃいけない。

そんな時に、おれにそう囁くものがあつた。それは、ぼんやり「危険」を伝えていた。だが、おれには佐久子の肉体をしりぞける勇氣はなかった。いやおれ自身、病的と思えるほど佐久子を求めはじめていた……

このような立ち入ったことは、長峰にはもちろん話さない。おれは医者としての長峰に従順だし、十分の尊敬をつくしている。ただそれは表面で、おれは長峰を嫌いであり、全然信頼もしていない。

……見慣れているはずの街である。電柱の列も、若芽を吹きはじめた街路樹も、商店の看板も、

いや、行き交う車や人波も一年前と変らないのに、すべての風景がよそよそしい。それは見知らぬ人に幽をむき出す犬のように、おれの頭に突き刺さってくる。宣伝の放送や、警笛や、あらゆる騒音が、巨大な量になって殺到してくる。こめかみのあたりが、しびれるように痛みはじめた。

知らず知らずに佐久子によりかかる姿勢になっていたのだろう、佐久子は腕に力を入れておれを支え、たえず「大丈夫？」ときいていた。

「佐久子。やっぱりよして帰ろうか」

おれは心からすまなく思いながら、哀願の口調で言った。

「気分がお悪いの？」

「頭がくらくらする……」

「そう。やっぱりいけなかったわね。ここから引き返します？」

だが、眉をよせて急に暗い表情になった佐久子を見ると、今更引き返すことは残酷だと思った。今朝、眼を輝かせて外出を提議したのは佐久子で、お天気もこんなにいいのだから、足ならしに街に出てみようと言うのだった。なるほど、茶の間に坐っていても透明な日ざしの感じられる日和だった。戸外には幸福感が溢れているように思え、よし、これなら行けるぞという気になったのだ。だが、ばろっ切れのようになったおれの神経には、やはり無理だった。……いや、無理だとはじめからわかつてはいたのだ。佐久子が知らないだけのことだ。おれは極力、こわれてしまったおれ

の神経を知られぬように振舞っていた。だから佐久子は、おれがほとんど平常の精神状態になったと思っっているのだ。佐久子をみじめにしないために、外出を続けよう。どんなことになるか、それはその時の事だ。

「なに、急に陽に照らされたせいかもしれない。すぐ慣れるだろう」

おれは歯をくいしばり、正面を向いてまた歩きだした。すれ違う男女が皆、おれにさげすんだ流し目にくれているように思われた。行き過ぎた所で、みんな一斉におれを振り返って、赤い舌を出していいような気がする。

貧血のせいかな、風景は古いフィルムのように黄色っぽい。

佐久子は気づかわしそうな様子で黙って歩いている。

そのうちにおれは、自分の背後のことがしきりに気になりはじめた。

……子供の頃、授業が退けて運動場を通って帰っていると、野球のそれ玉をイヤというほど背中にぶつけられたことがある。しばらく息ができなかった。それからかなり長く、いつも何か危険なものがあるから飛んで来そうな異常な心理におびやかされた。おれは話にきいた狐のように、道を歩いていて、何度もヒョヒョイとうしろを振り返るくせがついてしまったものだった。

同じ心理である。この年になって、この街路で、どうしてもそれがよみがえったのか。

よそう、よそうと思ひながら、つい反射的に何度もうしろを見てしまう。

「どうなすつたの。どうして、そううしろばかり見ていらつしやるの」

佐久子が気づいてしまった。

おれは、あいまいにごまかした。これが最後だぞ、もう絶対にうしろを見ないぞ……と自分に言いかせて、もう一度首を廻した。

おれはその時、長峰の姿を人ごみの中に見た。いや、見たと思つたのだが、人違いだったろうか。幻視だったろうか。現在のおれは、自分の五官が信じられない。そいつは茶色のオーバの襟を立てて、顔をかくすようにしていた。百メートルばかりうしろだった。

「長峰君のようだったが……」

佐久子はふと、体をかたくしたらしかった。

「本当？ どこに？」

だが、それらしいあたりには、もう長峰だとおれの思つた姿はない。

「うそおつしやい。長峰さんが今頃こんな所を歩いてるはずはありませんわ」

抑えた口調だが、いくらか腹立たしげだった。長峰のことを口にする、なぜか、佐久子を不機嫌にするようだ。おれの見ている限りでは、佐久子は長峰に丁重である。幾分よそよそしいとも言える。長峰が佐久子に愛情を抱いているとしても、佐久子のほうでは……しかし、おれはそれ以上

考えないことにしている。おれは、自分の病的な猜疑心がどこまで行こうとするのか、その結果、どのように佐久子を侮辱することになるか、それが恐ろしい。

口の中がカラカラになっている。だが、背中はずめた汗で寒気がする。身につけたオーバの重さが、急にやり切れなく感じられる。おれは、自分を日向に投げ出された一かたまりのぼろのように思う。

五日ほど前の朝だったが、佐久子は久しぶりにかみそりを出し、肌ぬぎになって顔やえりを当りはじめた。見ていると、いかにも慣れない手付で、危っかしい使い方をしているので、剃ってやろうと言った。その時はいい気分で、気軽にかみそりを手にした。

佐久子の生毛の見える肌は、ほのぼのとかすんだ白さだった。おれはそっと肩を抱いて、えり元に顔をうずめた。おれには何もいらぬ。世界がどうなるうとかまわぬ。おれには佐久子だけがいればいい。おれの人生は、佐久子との愛情だけで十分だ。……

かるくたしなめられて、いざ、剃ろうとしたが、おれは何という愚か者だったろう。かみそりの冷たい鋭い刃と、佐久子の柔軟な肌との対照が、おれの病んだ心にどんな刺激を与えるか気づいた時はおそかった。

あの呪われた誘惑が、兇暴な、めくら滅法の「破壊」の欲望が、例の身ぶるいするような感覚と共におれを圧倒しはじめていた。

それは佐久子の肌か、おれ自身の頸か、どちらかだった。おれは刃先がズウンと肌に沈み、鮮血の糸を引いて厚い脂肪層が切り開かれる様を見た。また、おれ自身の頸動脈をざくつと切りさく手のさばきを感じた。

神に祈る気持で落ちつこうとあせったが、飛び上るような心臓の鼓動で手元は激しく動いている。今、この瞬間にも発作的にやりそうだ。おれはかみそりを乱暴に畳の上に投げ出して、「自分でやったほうがいいだろう」という意味のことを、かろうじて普通の調子で言った。

佐久子は、あっけにとられた様子でおれをじっと見ていたが、「勝手な方ね」と笑っていた。

そのあと、別室で横になり、胸をはだけて眼を閉じたままじっとしていた。おれは、もうだめだ。涙は畳に吸いこまれた。

横断歩道を渡ろうとするおれの姿を通行人が注目していたとしたら、彼らはおそらく噴き出したことだろう。まだ四十には間のあるおれが、まるで老人のように背を曲げ、首を前に突き出して、血走った眼をキョロつかせている。大あわてにあわてているようで、足はなかなか前に進まないのだ。

おれはシグナルが赤に変わり、乗物の流れが一斉に襲いかかってくるのを恐れていた。轢き倒されるという恐れではない。おれ自身が、車輪の下に飛び込みはしないかという恐れなのだ。

……おれは子供の頃からひよわな神経を持っていた。少しの刺激でも耐えられないほど、おれにひびいた。

学校の映写会で西洋物の三巻ばかりの喜劇を見たとき、その中で一人のいたずら好きの少年が、鉄橋の真中で汽車に出会うシーンがあった。逃げることも身を避けることもできないので、レールの間に長くなって伏せ、死んだようになっていると、汽車は少年の背中すれの所でうまく通過してしまふ。少年はキョトンと頭を上げる。すると、汽車がどういふわけか逆行してくるので、また伏せる。そのくり返して、見ている者はゲラゲラ笑っていた。が、おれだけは冷汗をかきながらこんなことを考えていた。……あれが、もしおれだったらどうだろう。おれは汽車が通過してしまふまで待ち切れずに、ひょいと頭を上げてしまふのではないだろうか。一瞬間でおれの頭は粉碎され、おれという存在はなくなってしまう。そうだ。きっとおれはむちゃくちゃな衝動にかられて、頭を上げてしまふ……おれは、闇の中で悪寒にふるえていた。

鶏の砂嚢の消化力を試すため、針を栗のイガのように出したボールを造り、オブラートに包んで呑み込ませるといふ実験の話を聞いたことがある。針を吞ませる……そのことに、おれは病的な牽

引を感じた。おれは針や尖ったものを見ると呑み込みたくなるので、それらを恐れた。高い所に立つと、飛び降りたい衝動に襲われた。形容しがたい力で、それは、おれを引きずり込もうとするのだった。

人間は自己保存の本能とともに、自己破壊の本能をも持っているのだろうか。そうだとすれば、おれは、自己破壊の本能を過度に具えているのだろう。

もし、おれに譲られた多額の財産がなかったとしたら、とつくに世の中から消えていたことだろう。おれの生命力は稀薄であった。おれは足音を忍ばせるようにひっそりと生きているだけで、人生に希望も関心もなかった。それに応ずるように、人生のあらゆる出来事はおれを素通りして行った。戦争すら、おれにとつては無だった。兵隊にも取られなかったし、全国を焼土にした爆撃にも、かけ違って会わなかった。おれは爆弾の衝撃を知らずにすんだ。おれの世の中を眺める眼は一種の終末観に常に彩られていて、隣人も通行人も、あらゆる人間がおれには無関係な、いわば別世界のまぼろしに見えた。生き伸びたのは、ただ死のうとする積極的な意志と機会がなかったからにすぎないし、財産によって生存競争から落伍することを免れていたのだった。

それでもおれは、一応人なりに学校を出て会社員になった。もちろん昇進しようという野心もなく、同僚との付き合いもなかった。全く影のような存在であり、それに不服もなかった。